

森林沼澤に於ては、殆んど不可能の事であつたらう。これ我國史を顧みると最近まで各地方に於て境界争の絶えない最大の理由であつたらうと思ふが、塚相論のために隣村との間に久しきに亙る係争問題のあつた事は、當時の住民に取りては何よりの不幸ではなかつたか。之を他面から見れば、

莊民・村民が一致團結して事に當らんとする思想を養成するには役立つたらう、莊民村民の一味同心といふ練習は出來たらうけれども、何だか彼等が浴した太陽の光は黒ずんでるやうに見え、彼等の心境は圓味がないやうに思はれてならない。

佛典に顯はるゝ振旦の語に就いて (上)

文學博士 松本文三郎

一

古來我邦の佛敎者特に悉曇學者は、支那國土を顯はすに振旦の語を用ひて居ることは人の能く知る所である。何時頃から此語が我邦に輸入せられたかは明らかに判らぬが、平安朝に至る迄の我邦

の學者は専ら唐とか大唐とか稱して、未だ振旦の語を用ひて居ないやうである。が弘法大師は一方には大唐の語も屢々之を用ひて居るが、他方には又振旦の字を以て之を顯はす、例之へば「梵字悉曇字母並釋義」又「摩騰竺蘭等以此梵文、來傳振旦

字非篆隸、語隔梵漢」等といふが如きである。爾來佛教學者は往々にして之を用ゐる、安然の悉曇藏にも大唐や漢地の語と並び振旦又は斯那とも稱し、「摺拾印度、斯那、扶桑之群解、陶甄梵國漢地吳人之衆音、苟採祖述祖承之正文、非敢穿鑿穿削之自作」(悉曇藏序)ともいふ。元來振旦の語は支那人の自から其國土若くは住民を呼ぶ名稱ではないのであるから、支那の學者や支那に學んだ我邦の學者も、一般に振旦の名を以て彼等と呼ぶことはない筈である。所謂悉曇學者の梵語を習つたものが、印度に斯く稱するといふ所から、必らずしもその新智識を街つた譯でもなかつたらうが、極めて新奇ハイカラの名稱として之を我邦にも輸入し來つたのであらう。此等の點から考へて見ても弘法大師によつて此語が我邦に移殖せられたのは最も當然の顯象のやうにも思はれる。

弘法大師の留學した唐代の佛教學者には外國人

殊に印度人が支那を振旦と稱して居たことは一般に認められて居た。而して此智識を支那人、殊に又佛教學者の間に布及せしめたのは、實に玄奘であつた、玄奘はその大唐西域記に於て屢々振旦の語を用ゐて居る。勿論玄奘が自から其國號をいふ時には、常に大唐といひ、決して振旦とか至那とはいはぬ、が印度人の語を寫し、若しくは印度人をして其何處なるかを知らしむる時には此語を用ゐて居る。例へば同書(卷五)戒日王と玄奘と初對面の時の問答の顛末を述べて、

戒日王勞苦已曰、自何國來、將何所求。對曰從大唐國來、請求佛法。王曰大唐國在何方、經途所亘、去斯遠近。對曰當此東方數萬餘里、印度所謂摩訶至那國是也。王曰摩訶至那國有秦王天子、少而靈鑿、長而神武……秦王破陣樂、聞其雅頌、于茲久矣、盛德之譽、誠有之乎、大唐國者豈是耶。對曰、然、至那者前王之國號、大唐者我君之國稱。

ともいひ、同(卷九)那爛陀寺の條下にも、伽藍の
工事終るや凡聖を延請し五印度の僧萬里雲集し、
坐定まつて後二僧遅くに至る、或人問ふて曰ふ、
大德何に由つて後く來るかと、彼等對へていふ
「我至那國也、和上嬰疹、飯已方行、受王遠請、故
來卦會、問者驚駭」といふ稍奇怪な傳説を掲げ、
同(卷四)至那僕底國の條下にも、其國名を釋し「唐
言漢封」と注記して居り。慧立等の大慈恩寺三藏
法師傳も亦屢々振旦と同一の脂那の國號を記す、
而してそれは常に印度人の語として玄奘の生國を
指して居るのである。戒賢が玄奘の爲めに瑜伽論
を講ずるや、一婆羅門の言として、「今見脂那僧來、
師復爲講」といひ(卷三)、或は「玄奘支那國僧、
來此學問、歲月已久」といひ、或は「支那國蔑戾
車地(mleccha 外人、蠻人、外道)輕人賤法、諸佛
所以不生」といひ、或は鳩摩羅王の戒賢に與ふる
書信にも、「弟子願見支那國大德、願師發遣慰此欽

思」といひ、其他「支那僧今何在」とか、「師從支那
來」とか(同書卷五)、脂那又は支那の字は諸處に散
見する。玄奘は當時上下の歸依を受くること最も
深厚なりと、其數奇を極めたる十有七年の印度旅
行は、一世の人心を傾注せしむるに餘りあつたの
で、その西域記並びに慈恩傳の顯はるゝや、當に
佛教者のみならず當時の有識階級のもの、一般
に印度人が唐の國土を振旦又は脂那と稱するを知
るに至つたことと思はれる。

尙ほ唐時代には經典の音義なるものが諸種顯は
れて居り、而して此等にも多少づゝ振旦に對する
釋義が出て居り。例之へば玄應の一切經音義(卷
四)にも

振旦 或曰眞丹、並非正音、應言支那、此云漢國也。
又亦無正翻、但神州之惣名也。

といふ。慧苑の新譯大方廣佛華嚴經音(卷下)にも
前と大體同じく「震旦國、或曰支那、亦曰眞丹：

…今此漢國是也」といひ、降つては五代天福年間の可洪の隨亟錄(卷三)にも、「真丹、音丹亦云震旦」とある。此等の音義は固より其書の性質上、一般社會に普及せらるゝものではなく、僅かに少數の佛教者間に行はれたに過ぎぬのみならず此等外國のことに關しては、主として西域記や慈恩傳に依るものであるから、新たに又廣く其智識を擴布したものとはいはれないが、又幾分之を助たに相違ない。兎に角玄奘が一度振旦の語を唐人の間に傳へてから、普ねく一世に知らるゝに至つたことは殆んど疑を容れない事實である。で唐代長安に留學し、又悉曇に就き學ぶ所あつた弘法大師が、之を我邦に輸入したのも秋毫怪しむに足らないのである。

尙ほ序に一言して置く。印度に於ては古から支那國を *China-sthāna* (= *chīnistān*) とし、*China* は支那人にして、*Sihana* 住處、國土の義である。支那

に振旦、真丹、震旦、脂難、旃丹等となすのは其音譯であり、脂那、至那、斯那、支那等といふのは即ちその略である。或は *Sihana* の代りに *Indo-sihana* 等の語を以てすることあつたらしい。*Indo* 即ち泥舍は同じく國の義であり、*Indo-sihana* も亦國家、國土を意義する。印度の *China* は希臘、羅馬人の *Sinae* 又は *Thinae* と稱するものと同一なることはいふ迄もない、印度王の *Candagupta* を希臘人が *Sandococtus* と稱するに見ても知るべきである。併し希臘羅馬の *Sina* が印度の *China* から來たものか或は西域地方の言語から兩者が各其傳播の際に變じ來たものかは明らかならぬ。が少くともその共同の語源を有したことは疑ない事實である。

二

玄奘が印度に至つた時、印度人は既に至那國の存在を知つて居た。此事は前に引用した西域記の文に戒日王が大唐國とは何れにあり、又その遠近

の距離如何と問へるに對し、玄奘は印度の東北數萬餘里にして「印度所謂摩訶至那國是也」といへるを以ても明らかである。玄奘は斯く印度人の所謂 China の自國民の名稱たることは之を知つて居たが、何が故に之を至那と稱したかに就いては更に之を知らなかつたやうである、否意識的にか又無意識的にか判らぬが、玄奘は大なる誤解をなして居たものゝやうにも思はれる。而して印度の

o.ii の音に秦の字を宛てたのも、抑も玄奘に始まつたものゝやうである。秦の字は今の音 o.ii であるが、唐時代にも印度の o.ii か又は最も之に近いものであつたらうと思はるゝから、印度王が「嘗聞摩訶至那國有秦王天子、少而靈鑒、長而神武、昔先代喪亂、率土分崩、兵戈競記、群生荼毒、而秦王天子、早懷遠略、興大慈悲、拯濟含識、平定海內、風教遐被、德譯遠洽、殊方異域、慕化稱臣、民庶荷其亭育」といひ、更らに之に次ぎ「威歌秦

王破陣樂、聞其雅頌、于茲久矣、盛德之譽誠有之乎、大唐國者豈此是邪」といつたので、玄奘が印度人の所謂 o.ii は即ち秦であると解し、之に對へて然、至那者前王之國號、大唐者我君之國稱といひ、更らに之に次ぎ

昔未襲位、謂之秦王、今已承統、稱曰天子、前代運終、群生無主、兵戈亂起、殘害生靈、秦王天縱含弘、心發慈悲、威風鼓扇、郡凶殘滅、八方靜謐、萬國朝貢、

といひ、o.ii を太宗の太子たりし時の秦と解釋したのも必らずしも怪しむに足らないのである。勿論西域記の此文は少しく曖昧であり、秦王破陣樂の秦王とは、太宗の太子たりし時を意義するのは明らかであるか。印度王が始め摩訶至那國に秦王天子ありといへる時の秦と至那とは同一の china ではなかつたらうか。若し至那と稱するのは一般の國號で、秦王と稱するのは太子たりし時の太宗を意味するものとすれば、後に「至那者前王之國號

大唐者我君之國稱」といひ、又直ちに之に次ぎ太子たりし時の太宗の功業を述ぶるのは頗る奇怪のことゝいはなければならぬ。或は其發音の同一なる所から、戒日王も之を同一視し、玄奘も破陣樂のことよりして直ちに兩者を同一の意義に解するに至つたのではなからうか。秦王破陣樂とは文献通考(卷十五)にも「唐之自製樂、凡三大舞、一曰七德舞、二曰九功舞、三曰上元舞、七德舞者、本名秦王破陣樂、太宗爲秦王破劉武周、軍中相與作秦王破陣樂曲、及卽位宴會、必奏之」といへるを以て知るべきである。で破陣樂の ㄱ ㄷ の秦であることは疑ないのであるから、玄奘は果して一般に印度人の所謂至那國を秦國と解したか否は判らぬが、印度王が始めに至那國といひ、直ちに又秦王のことを問へるにより、王の所謂至那とは秦を意義するものと見做し、秦王卽ち後の太宗の功德を述べたのかも知れぬ。

今之を慈恩傳に參照するに、同書(卷五)には西域記に擧げたる最初の大唐國は何方にあるかとの問答はなく、玄奘の戒日王に會見するや、王は直ちに「師從支那國來、弟子聞彼國有秦王破陣樂歌舞之曲、未知秦王是何人、復有何功德、致此稱揚」と問ひ、玄奘は此に秦王の人となり又其功業を述べ、終りに「秦王者卽支那國今之天子也、未登皇極之前封爲秦王」といひ、單に秦王のことのみを説き、支那の國號を秦と同一視しては居なかつたものゝやうである。これが或は玄奘の眞意を傳へたものであるかも知れぬ。西域記の文の曖昧なるは、戒日王が支那の國號を秦の ㄱ ㄷ と同一なるものゝ如く誤解して居たらしいので玄奘も寧ろ外交的辭禮を以て秦王のことゝして應酬したのかも思ふ。尙ほ之と關連して考ふべきは前にも一言した西域記(卷四)に至那僕底 Chinapati を「唐曰漢封」といひ、又同書(卷十二)に掲盤陁國王が自

から稱して「至那提婆羅咀羅」Cinadvagotra といつたところを「唐言漢日天種」とあることである。此にいふ *Roba* とは主、支配者、所有者の義であり、提婆は天又は日神、*Roba* は種族の意である。玄奘が此に至那を漢と譯し秦と譯して居ないのである。彼は印度人の所謂 *China* を以て秦王の秦と解して居なかつたことは愈明らかなのである。但此にいふ漢とは漢代の漢か、漢土漢人と稱する時の漢か。至那僕底の國名は玄奘の傳ふる所によれば、昔月氏の迦膩色迦王が、東方諸國の質子を置いた處であるから、斯く名づけたものといふ。然らば是れは時代からいへば漢代に相當するのであるから、之を漢と譯したとしても通するが、漢日天種の傳説は斯く時代の明確なるものではない。西域記には昔波利或は利字なし刺斯國王が婦を漢土に娶り、迎え歸つて此に來た時に、兵亂が起り、前後の路が雍塞せられ、遂に王女を孤峯に

置き、此に王子を生じたのが、後に其地方の王となつたのである。斯く其祖先の母が漢土の人であり、父は日天の種であるといふので、後世に至る迄斯く稱したとある。斯く年代の漠然として確として徴すべきないのであるから、必らずしも漢代のことか否も判らぬ。のみならず、此には玄奘も「娶婦漢土」ともいふを以て見れば、所謂漢とは漢代の漢ではなくして、寧ろ廣く今の所謂支那を指すものと思はれる。斯く考へ來れば愈以て玄奘は印度人の *China* を以て秦王の秦とはなさず、寧ろ一般に後人の中國と稱するものと全然同様に解して居たものといはなければならぬ。

が余輩は尙ほ此に一の疑ふべきものがある。西域記にいふ揭盤陁國王の祖先に關する傳説は頗る疑はしいものであり、彼が果して支那女の生ずる所であつたか、又波利刺斯王が、支那から王妃を迎えたことが果して事實であつたか、此等は吾人

の今容易に知るべからざるのであるから、此傳説は姑らく置くが、月支の迦賦色迦王が河西の諸國からの質子を置いたから、其國を至那僕底と稱するに至つたといふのは、或は事實であつたらうかと思ふ。併し王が假令ひ質子を獲たとしても支那王が月氏に質子を送つたとは考へられぬ。當時月氏の勢力は西北印度から西はカブール地方、北はバクトリアにも及んで居たが、支那が之が爲め脅威を感じるには至らなかつた。又支那の歴史に於ても迦賦色迦王との交渉に就いては殆んど何等の説及ぶものはない。王と殆んど同時代（此事は後に説く）と思はるゝ後漢桓帝の延熹の三年及び四年には、「天竺國來獻」の單簡なる文字が顯はれて居るのみである。此にいふ天竺又は身毒と稱するものは、或はシンド地方のことではなからうかと思ふ。若し果して然れば月氏の印度王を意義し、而して當時の月氏王は恐らく迦賦色迦であつたら

うと信ずる。が假令ひ迦賦色迦王が使を遣はしたものとしても、單に平和の使節であつたらしいから、質子を支那より彼に送るべき筈はない。のみならず西域記にも「昔迦賦色迦王之御宇也、聲振隣國、威被殊俗、河西蕃維、畏威送質、迦賦色迦王、既得質子、賞遇隆厚……質子所居、因爲國號」といふ。即ち質子を送つたのは支那本土の王からではなく、河西の蕃維からであつた。此にいふ河西の蕃維とは果して何れの地方であるか判らぬが、支那域外の諸蕃は、支那の國勢張れば歸順し、衰へば離叛する。迦賦色迦王の時支那に隸屬して居たから、之を支那といつたのかも知らぬが、寧ろ印度に所謂支那とは少くとも其初めは唯漠然印度より北東の國土を稱して居たのではなからうか。

斯く西域記や慈恩傳に顯はるゝ所のみによつて之を見れば、印度の China は秦國でもあるが如く、

(勿論此秦は後世學者のいふが如く六朝時代の秦でもなければ、戰國時代の秦でもない)又玄應が漢國をいひ神州の總名なりとなすが如く、漢土即ち支那本土を稱するものゝやうでもあり、又少くとも支那域外の地をも包括した廣汎なる名稱のやうでもあり、頗る要領を得ない。而して支那なる名稱の何れよりして起りしかに就いては全然之に説及ばず、又秋毫の暗示する所もない。恐らく彼も之を明らかにし得なかつたのであらう。

玄奘が既に至那の意義に關しては秋毫説がなかつたのであるから、唐代の學者の之を知るべき筈はない。で偶々之に説及ぶものありとしても、甚だ奇怪なる想像説たるを免れぬ、彼等は唯其文字の形に就いて意義を符會したに過ぎないのである。

唐の釋法琳の辯正論(卷六)にはいふ

樓炭經云、葱河已東名爲震旦、以日初出、曜於東隅、

故稱震旦。

これは後世にも人の往々にして引用する所であり甚しきに至つては「日東隅に出で其色丹の如し、故に震丹といふ」と迄説いてある。辯正論は樓炭經を引いて居る、樓炭經とは西晋の法立、法炬の共譯する所で、惠帝(紀元後二百年代の末)の代に顯はれたものといふ、若し此經に斯かる文字があるとするれば、頗る古代から此の如き符會説が行はれて居たやうにも思はれるか、今傳ふる樓炭經には此文はない。元來これは註釋文のやうであるから、經典には元よりしてなかつたに相違ない。但法琳の見た樓炭經には、何處かに斯かる文が註記せられて居たのであらう。して見ればこれも法琳以前既に支那に顯はれたものである。併し此説の全然取るに足らざるはいふまでもない。震は易に「萬物出乎震」といひ、東方を意義し、且亦朝の義を有するにより音を寫せる語に對し、支那の字義を以て解釋したに過ぎない。殊に又日の東に上る

其色丹の如しといふが如きに至つては、寧ろ滑稽である。しかしこれも支那の原義が當時既に判らなかつたが爲めであつたに相違ない。

法琳の解釋よりも幾分尤もらしく聞へるのは惠苑の擧ぐる説である。惠苑はその華嚴經音義(卷下)にいふ、

震旦國、此翻爲思惟、以其國人多所思慮、多所計作故以爲名、今此漢國是也。

唐の李通玄造論、同志寧合論の華嚴合論にも、恐らく此説に据つたものと思はるゝが、「震旦、或曰支那、亦云眞丹、此翻爲思慮、爲此國人多思慮計度、以之爲名」(合論卷七十三)とある。併し印度に支那といふのも、元と外國の音を寫したのであるから、印度語として何等意義を有するものではない。思惟と翻すといふのは、恐らく梵語 *śamā* に稍相似た *citta* とか *citta* とかといふ語と混同したのであらう。此等は何れも思惟の義を有するのであ

る。で此説も畢竟符會取るに足らざるはいふ迄もない。

尙ほ翻譯名義集(卷三)脂那の下に次の如き説を擧げてある。

婆沙二音、一云支那、此云文物國、卽讚美此方是衣冠文物之地也、二三脂難、此云邊鄙、卽貶擯此方非中國也。

これも一見牽強の説たる明らかなであつて、詳論を要せざることである。支那も脂難も既に梵語 *citta* の音譯であるとすれば、其間に褒貶の意義の秋毫も存せざるは言ふ迄もない。で此説も唯翻譯の文字によつて案出せられた解釋に過ぎない。尙ほ此に婆沙に二の音ありといふのは、婆沙論の中に二様に音寫せられて居るといふ意味であつて、此論中決して斯かる二様の解釋が擧げられて居る譯ではない。しかし唐宋人の間斯かる説もあつたものと見える。